



Data

原案・監督・脚本・編集：是枝裕和
出演：福山雅治／役所広司／広瀬すず／満島真之介／市川実日子／松岡依都美／橋爪功／斉藤由貴／吉田鋼太郎

👁️👁️ みどころ

必ずしも法廷は真実解明の場ではない！本物の法曹関係者や、ジョン・グリシャムの「法廷モノ」小説の愛読者はそれをよく知っているが、一般的には大きな誤解が……。是枝裕和監督が本作で提起したそんな論点を、福山雅治扮する重盛弁護士「すべては依頼者の利益のために」という哲学と共にしっかり勉強したい。

供述がコロコロ変わる依頼者は要注意。それは当然だが、役所広司扮する強盗殺人の被告人のように、公判のラスト段階に至って「実は私、殺してないんです」と言われれば法廷も大混乱！おじさん同士の対決に、実は14歳の娘がキーウーマンになるところが本作のミソ。有罪なら死刑は確実……。？それも含めた判決予想をしながら、是枝流「法廷モノ」を検証したい。

なお、同時期に公開されたインド映画の「法廷モノ」の傑作『裁き』（14年）を合わせて鑑賞すれば、もっと「法廷モノ」の検討の視点は広がるから、法曹を目指す諸君はぜひともチャレンジを！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■是枝裕和監督が「法廷モノ」に初挑戦！■□■

邦画の「法廷モノ」としては『12人の優しい日本人』（91年）、『裁判員—決めるのはあなた』（03年）（『シネマルーム3』330頁参照）を筆頭とし、『ゆれる』（06年）（『シネマルーム14』88頁参照）、『疑惑』（82年）（『シネマルーム10』33頁参照）、『事件』（78年）（『シネマルーム10』52頁参照）、『それでもボクはやってない』（06年）（『シネマルーム14』74頁参照）等々の名作があり、それらの評論は私の『名作映画か

ら学ぶ裁判員制度』(10年・河出書房新社)に収められている。

他方、是枝裕和監督と言えば、主演を務めた柳楽優弥がカンヌ国際映画祭で最優秀主演男優賞を受賞した『誰も知らない』(04年)、『シネマルーム6』161頁参照)が有名だが、その後の『花よりもなほ』(05年)、『シネマルーム11』128頁参照)、『歩いても歩いて』(08年)、『シネマルーム19』325頁参照)、『空気人形』(09年)、『シネマルーム23』225頁参照)はそれぞれ面白かったし、『そして父になる』(13年)、『シネマルーム31』39頁参照)、『海街diary』(15年)、『シネマルーム35』未掲載)、『海よりもまだ深く』(16年)、『シネマルーム38』250頁参照)は、カンヌ国際映画祭での受賞を含めて、それぞれ大きな話題を呼んだ。そんなは枝監督が本作ではじめて「法廷モノ」に挑戦!

■日本とインド、両監督の「法廷モノ」初挑戦の理由は?■

去る9月5日に観たインド映画『裁き』(14年)を監督したインドの若き俊英チャイタニヤ・タームハネーは初の「法廷モノ」に挑戦した理由を「裁判を実際に傍聴する機会があったこと」と語っていたが、さて是枝監督は?その点について、パンフレットにある是枝監督のインタビューによると、次の2つの質問に対し次のとおりに答えているから、まずはその確認をしておきたい。

—今回の作品はサスペンスタッチの法廷劇になりました。着想はどのあたりにありましたか?

「今回はまず弁護士の仕事をちゃんと描いてみたいと思いました。『そして父になる』の法律監修をお願いした弁護士の方と話をしていたときに『法廷は真実を解明する場所ではない』と言われたんですよ。そんなの誰にもわかりませんからって。ああ、そうなんだ、面白いなと思ったんです。それなら結局、何が真実なのかわからないような法廷劇を撮ってみようと思いました」

—脚本の執筆は試行錯誤を重ねたそうですね。

「これまでの作品は登場人物にジャッジを下さないという視点で撮ってきました。要するに神の目線を持たずに撮ってきたんです。でもサスペンスや法廷劇は本来、神の目線がないと成り立たないジャンルですよ。それなのに僕はやはり神の目線を持ちたくなかったので、そのせめぎあいでも苦しみました(笑)」

近時の邦画は「原作モノ」が多いが、本作は是枝監督が原案も脚本も書いた上で監督し、しかも編集まで自分自身でやっている。役割が分離している近時の映画作りの中でこれは異例だ。さあ、いろんなやり方で是枝監督が法廷モノに初挑戦した本作の出来は・・・?

■福山雅治の弁護士役は?弁護士会の応援は?■

福山雅治は歌手としても超一流だが、『そして父になる』で「是枝組」の主役として大活

躍したこともあり、本作では一方の主役の重盛朋章弁護士役で登場！前述したとおり、是枝監督が本作のキーワードにしたのは「法廷は真実追及の場ではない」ということだが、それを本作でどのように「入れ込む」かについては、法律監修として松田総合法律事務所の岩月泰頼弁護士たちの応援を得たらしい。そのためパンフレットには、同弁護士による「法廷におけるいくつかの真実」があるから、法廷に縁もゆかりもない人たちはこれを読めば本作の理解がより深まるはずだ。

他方、9月9日の公開に先立つ9月8日の読売新聞（夕刊）には、本作の宣伝とともに、「弁護士は、依頼者を守るために徹底的に向き合います。」「大阪弁護士会は、映画『三度目の殺人』を応援しています。」「ご相談は、大阪弁護士会へ。」の文字が躍り、さらに、「心を揺さぶる心理劇が今、幕をあける」「大阪弁護士会×三度目の殺人」という見出しの中で、亀井倫子弁護士と福山雅治のインタビューが載せられている。たしかに、一般的には「法廷は真実を明らかにする場」だと考えている人は多いが、それは誤解とは言わないまでも、大きな誤り。とりわけ、刑事裁判は真実追及の場ではなく、有罪・無罪あるいは量刑をめぐる「勝ち負け」を争う場だし、民事裁判も真実の究明ではなく、基本的に利害調整の場だ。そのことは弁護士42年目の私にはよくわかっているが、やはり一般的にはわかりにくいことだろう。しかして、本作ではそんな問題意識についてどこまでの突っ込みが・・・？

アメリカでは『レインメーカー』（97年）、『評決のとき』（96年）、『ザ・ファーム 法律事務所』（93年）、『依頼人』（11年）（『シネマルーム29』184頁参照）、さらには近時の『リンカーン弁護士』（11年）（『シネマルーム29』178頁参照）等々の「法廷モノ」で、よくも悪くも弁護士の仕事の実態が赤裸々に描かれているし、法廷が必ずしも真実追及の場でないことはよく知られているが、さて日本では？周防正行監督の『それでもボクはやってない』は警察や検察の取り調べの中でいったん自白し逮捕されてしまったら、その後がいかにも大変かの警鐘を鳴らしたが、本作はある意味法廷は真実追及の場と考えている多くの人たちへの警鐘になっている。重盛弁護士がいわゆる「軒弁」として雇っている川島輝弁護士（満島真之介）は当然のように真実の追及に懸命になっているが、それに対して投げかける重盛の冷やかな言葉を、一般市民たるあなたはどのように聞くのだろうか？弁護士の見立てでは、そんな点も本作の大きな注目点だ。

■■■徳川家康も殺人犯も！役所広司の役作りに注目！■■■

本作では、形の上では福山雅治演じる重盛朋章弁護士が主役だが、ストーリー形成の核となる実質上の主役は、勤務していた食品加工工場の社長を殺し、財布を奪い、死体にガソリンをかけて燃やした容疑で逮捕、起訴された男、役所広司演じる三隅高司だ。三隅は30年前にも強盗殺人の前科があったから、当初三隅の国選弁護人となった摂津大輔（吉田鋼太郎）弁護士の見立てでは、死刑確定！

本作がなぜ「三度目の殺人」とタイトルされているかは大きなポイントだが、いわゆる「やめ検」で、刑事弁護にかけては百戦錬磨の摂津弁護士が音を上げ、年は若いが修習同期の重盛弁護士に弁護の応援を頼んだのは、面会のたびに三隅の供述がコロコロと二転三転するためだ。ある、ある、こんな事件。民事、刑事事件を問わず、そんな依頼者に遭遇した場合、弁護士として困惑するのは当然。私だってそんな事件ははっきり言って願ひ下げだ。国選弁護人は通常1人だが、死刑または無期の懲役等に当たる事件の場合、国選弁護人を2名以上に増やせるため、摂津は重盛を主任弁護人に据えて、自分は一步退く(楽をする)べく泣きついたわけだ。

「法廷モノ」の華は証人尋問。ハリウwoodsの「法廷モノ」では、その丁々発止のやりとりが最大の見どころになっている。日本の刑事裁判は近時、①裁判員裁判、②公判前整理手続き、③集中審理方式となっており、本作でもそんな刑事裁判の実態を手際よく見せてくれる。また、本作では被害者の妻である山中美津江(斉藤由貴)と被害者の娘である山中咲江(広瀬すず)の証人尋問と、三隅の被告人質問が行われるので、それが「法廷の華」としての見どころになっている。しかし、本作の真の見どころは実はそれではなく、拘置所における弁護人と被告人との面会シーンだから、それに注目!

役所広司は、ほぼ同時期に公開された『関ヶ原』(17年)での徳川家康役で存在感を示し、岡田准一演じた石田三成をこてんぱんにやっつけたが、本作では強盗殺人、死体遺棄事件の被告人三隅高司の役で、摂津弁護士だけではなく重盛弁護士をも翻弄!本作では、俳優としては福山雅治より数段格上である役所広司の三隅高司役の役作りに注目!

■□■動機は怨恨?それとも金目当て?いやいや実は・・・。■□■

強盗殺人事件の弁護方針では、犯人性や犯行態様を争わない(争えない)場合、動機が問題となる。つまり、怨恨?それとも金目当て?あるいは、それ以外の動機?ということだが、本件で重盛が立てた作戦は怨恨。なぜなら、金目当てより怨恨の方が、量刑上、動機において情状酌量の余地があるとされているためだ。さらに、重要物証である盗まれた財布にガソリンの跡がついていたことを発見した重盛は、これなら財布を奪おうとしたのは三隅を殺した後だと認定できるため、「強盗殺人」起訴事実を「殺人プラス窃盗」というより軽い犯罪に落とせると考えたから、これにて弁護方針はバッチリ!摂津弁護士も、重盛の事務所では「軒弁」をしている川島弁護士も、さらには事務所の事務員である服部亜紀子(松岡依都美)も(?)そんな弁護方針に納得したが、さて肝心の三隅の納得は・・・?

本作は重盛、摂津、川島の三弁護士が三者三様の弁護士像を見せるが、これに対する担当検事、篠原一葵(市川実日子)はまだ若い。それだけに少し固さがあるが、その隣にはお目付け役(?)のベテラン検事がついている。そして彼は公判にも公判前整理手続きにも同席していたが、こんな風景は日本では日常茶飯事だ。中国映画『再生の朝に —ある裁判官の選択— (透析 Judge)』(09年)では、裁判官が判決を下すについて「裁判

委員会」という裁判所内の機関で討議されることに驚かされた（『シネマルーム34』345頁参照）が、本作では公開の法廷ではなく「密室」で行われる「公判前整理手続き」での、裁判官、検察官、弁護士の打ち合わせの姿に、法曹関係者でない一般の人々は驚かされるはずだ。今年の流行語大賞は多分『付度』で決まりだが、そこに見る風景はまさに「腹芸」であり、「暗黙の了解」であり、『付度』そのものだから、その風景にもしっかり注目したい。

しかして、重盛弁護士が立てた「殺人の動機は怨恨」という主張は、公判でどこまで貫徹できるの？本作では、被告人質問の直前に至って、三隅の供述が「私は殺していません！」と急転換するため、法廷は大混乱に陥り、そこからが本作の「核心」となるが、まずは動機をめぐる検察側VS弁護側の攻防戦をしっかり検証したい。

■このネタの出所は拘留所内の三隅から！？■

民進党の幹事長内定の日に、山尾志桜里衆議院議員が9歳年下のイケメン弁護士とホテルで密会！そんな特ダネを報じたのは、『週刊文春』の「文春砲」だ。それと同じように(?)、公判前整理手続きで争点整理をしている真っ最中に、拘留所内の三隅を出所として、週刊誌に「社長の奥さんから頼まれて保険金目当てで殺した」という「独占告白」が載せられたから、重盛はびっくり！これでは弁護士はたまったものではない。

そこで重盛が直ちに拘留所に赴いて三隅と面会し、その真偽を確かめると、社長の妻美津江から、その依頼とも取れるメールが三隅の携帯電話に残っているうえ、三隅の銀行口座には給料とは別に50万円が振り込まれているらしい。重盛がさらに突っ込んで質問すると、これは社長（夫）殺害の謝礼1000万円のうちの、とりあえずの着手金らしい。すると、社長殺しは三隅の単独犯ではなく、美津江と三隅の共謀共同正犯？しかも、その主犯は三隅ではなく美津江だから、これは三隅にとって大いに有利。撰津はコロコロと変わる三隅の供述に半信半疑だし、三隅が示した物的証拠の不十分性を指摘したが、重盛は怨恨か保険金目当てかの弁護方針の選択は、「依頼者の利益のある方に決まっている」とクールに言い放ち、弁護方針を大きく切り替えることに。そのことに篠原検事は文句タラタラだが、そこは弁護士の力量の示し方によって粛々と・・・。

かくして公判前の争点整理手続きを終え、約3週間、5開廷と予定された公判手続きが開始されることになったが、今や重盛はみずからの弁護方針に自信満々。強盗殺人の起訴事実を殺人と窃盗に落とし、しかも主犯が美津江であるとの主張が認定されれば、重盛は十分な勝訴。そうなれば、自分の刑事弁護士としての名声も大いに上がるはず。そんな目論見さえミエミエだが・・・。

■共に14歳の娘がキーウーマンに！■

最近の東宝の若者映画をあまり見ていない私には、広瀬すずのイメージは『海街di a

ry』(15年)、『シネマルーム35』未掲載、『怒り』(16年)、『シネマルーム38』62頁参照)等しかない。本作では、その広瀬すが14歳の娘咲江役でかなり陰影のあるキーウーマン的な役割を演じている。重盛が三隅と咲江との「接点」を知ったのは、自分の足で聞き取り調査をやった結果だから、その弁護士としての地道な努力には拍手を送りたい。

社長の妻美津江は会社が儲けのためにやっていた「ある不正行為」を見て見ぬふりをしていたが、潔癖症の娘(?)咲江にはそれは我慢できなかつたらしい。さらに三隅にも咲江と同じような14歳の娘がいたこともあって、食品加工工場で働いていた三隅は咲江に対して父親のような優しさを示していたようだ。しかし、そもそも社長の娘が1人で従業員のアパートを訪ねること自体が異例。そして、もちろん咲江はそんな事情を重盛には何も語っていなかった。そんな咲江が重盛の事務所を訪れ、「三隅の助けになるのなら裁判で証言したい」と言い始めたから、重盛はビックリ。

さらに、公判が開始する中で、重盛が拘置所内の面会室で三隅から突然聞いたのは、「嘘ですよ、そんな話」と咲江の話を一笑に付した後の「本当は私、殺してないんです」との告白。これは咲江の申し出を受けた重盛が、咲江の言っていたことの真偽を改めて三隅に確認する中で飛び出した発言だが、さすがにこれには重盛も大混乱に……。いい加減にしてくれ!そんな三隅の供述は信用できない。摂津弁護士はそんな思いでいっぱいだったが、さて重盛弁護士は……。?他方、公判が進む中で突然、被告と弁護側の方針が「犯人性」を争うと変更されたことに何よりも困惑したのは裁判所。そんな状況下で、裁判官、検察官、弁護士三者間の腹芸のような打ち合わせは本作の見どころの1つだから、じっくりと……。

このように、本作では14歳の娘咲江がキーウーマンになるので、その言動に注目したい。ちなみに、本作には重盛にも離婚した妻との間に生まれた14歳の一人娘が時々顔を出してくるし、三隅の話しにも思い出話を含めた14歳の娘との語らいの日々が登場してくる。したがって、14歳の娘の存在とその言動は裁判の帰趨だけでなく、重盛と三隅のそれぞれの考え方にも影響していくので、その意味でも咲江の動向に注目!

■もし三隅が犯人でなかったら?真犯人は一体ダレ?■

弁護士は依頼者の話を丹念に聞くべきは当然だが、同時にその内容を鵜呑みにしたり、丸ごと信じてしまつてはダメなことも当然。依頼者の話は、その中身と共に、その話し方によつても信憑性が大きく変わってくるものだ。摂津弁護士は三隅の二転三転する供述に辟易していたが、拘置所内で金網越しながら目と目を見ながらの三隅の話しぶりはなかなか説得力がある。「よく覚えていない」と逃げる時は「ハーン、これはごまかしているな」と感じてしまうが、積極的に「〇〇ですよ」「△△ですよ」と語っていると、つい「なるほど、そうか」と弁護士の私ですら思ってしまうほどだ。

重盛が「保険金目当て殺人説」、「主犯、美津江説」をとって公判に臨んだのは法廷戦術的側面が強かったが、公判の途中で咲江が重盛の事務所を訪れて自らの証言を要請したり、拘置所内で三隅から「本当は私、殺してないんです」との供述を聞くと、重盛の頭の中は大混乱。あの冷静沈着だった重盛でさえ、つい金網越しに三隅に対して「本当のことを言ってくれよ」と泣きつくまでに……。当初、三隅は重盛に対して「重大な話があると言って社長を河川敷に連れ出し、後ろからハンマーで頭を殴って殺した後、会社までガソリンを取りに行き、死体を焼いた」と説明していたが、もし本当に三隅が社長を殺していないとすると、社長を殺したのは一体ダレ？ ひょっとして咲江？ そんなバカな……。

本作は「原作モノ」ではなく、是枝監督の原案・脚本に基づくもので、「法廷モノ」としての面白さ、「面会モノ」としての面白さ、そして「法廷は必ずしも真実解明の場ではない」という是枝監督の問題意識が手際よく表現されている。しかし、かつての松本清張や近時の東野圭吾原作のような本格的推理小説、犯人捜しサスペンスの視点から言うと、もし三隅が最後に告白したように、三隅が殺人犯でないのなら、真犯人は一体ダレ？ その点の追及が本作では甘いと云わざるを得ない。もし私が重盛弁護士の立場なら、三隅のそんな告白を聞けば、その直後に「だとすると、社長を殺したのは誰だ？」「誰だと思う？」と質問しているはずだが、一流の刑事弁護士のはずの重盛弁護士にそんな質問がなかったのは一体なぜ？ 重盛が弁護方針を急遽、「犯人性を争う」と切り替えたにもかかわらず、裁判所が腹芸的にそのまま審理を進め、判決言い渡しまでに至ったことを考えれば、弁護士の私には撰津と同じように判決内容はほぼ予想できる。

しかして、スクリーン上に見る判決言い渡しの内容は？ 私にはそれは予想通りだったが、さてその判決を三隅や重盛弁護士はどう受け止めるの？ 私なら、再度三隅の供述を突き詰めて精査したうえで、断固控訴だが……？

2017（平成29）年9月15日記